

野 犬

一二三册子

我がマンションは桂川沿ひにあり。土手には低き木や草の生ひ茂り、野犬多き地なり。幾年前、五十頭近く捕獲せられ、哀れにも殺處分にせられしといふ。しかしてこの數年、再び殖え始めたり。雨の續く日、川の水の増しぬるときには、二十頭ほど土手をあがりて雨に打たれをり。

去年の春、再び野犬狩りありしも、三頭ほど逃れしものあり。一頭は牝にて、他の牡二頭にいぢめられき。夜中にいぢめらるる野犬の響くことあれば、助けてやりたき氣持ち抑へがたし。なれど、何も得せぬまま眠るのみなりき。

その牝の野犬、やせ衰へ、土手をうろうろ彷徨ふを見て、つひに我たまらず、餌を與へたり。夕刻、我が愛犬の散歩のついでに、餌を數箇所に蒔くこと半年。

なれど、去年の晩秋、徹底的なる野犬狩りありき。無事に生き延びられよとの願ひもむなく、つひに消え失せて、一頭だに残るなし。餌付けをせしばかりに情も移れり。しばらくは夜の眠りも淺くこそなりぬれ。

(令和四年十九日受附)